

よく笑ふ赤子に螢飛ぶさうな

田中裕明（『先生から手紙』）

田中裕明の句のなかでこの句がいちばん好きだ、と何度か表明したことがあるのだけれど、いつも不可解な沈黙が返ってきた。「田中裕明ならもっと凄い句があるだろう」とか「この句は甘すぎるんじゃない」とか、そういうことだったかもしれない。

けれど私はこの句が好き。裕明先生の人としてのやさしさが素直に伝わってくる。どこか天上的なところも。

この句は、田中裕明が「青」の「碧鐘賞」という結社賞を受賞した作品二十句に含まれている。平成三年のことである。波多野爽波は、「いまさらではあるが」というニュアンスを込めて、「この両君を今こそ『青』の場で顕賞しておかねばと思ったのである」と選後の言葉を残し、その年の十月に亡くなっている。両君とあるのは、岸本尚毅さんと同時受賞だったからだ。「青」441号には裕明の「受賞のことば」が掲載されている。少し長くなるが引用しておきたい。

「俳句で師に学ぶというのは結局自分の自信のある作品と師の選がぴったり重なるようにすることだと爽波先生が「青」に書かれていた。虚子に学んだ経験に即した教えである。「青」で俳句を勉強してきたのはそれを学んできたのだなと今にして思う。自分で手ごたえのある一句か二句が爽波選にはいるかどうか、その瞬間に息をこらしているのである。

だから爽波選に入って嬉しいというのも、自分でどの句に自信があるのかもわからないような頃のはなしで、しばらくすると選に入ってもただ嬉しいというのではなくてくる。自分でもよくわからないような句が入選すると何故その句が良いのかが不思議で喜んでいられない。手ごたえを感じた句が爽波選に入れば喜ばしいのだけれど、それはそれで何となく手ばなしでは喜べないような気もする。もちろん爽波選に入らないときは心たのしまないのだから、俳句というものもなかなか辛い。よくも十五年もやってきたものだ」